

# 石川啄木と近代都市「東京」\*

尹在石\*\*

---

## 目次

---

- 一、はじめに
  - 二、石川啄木における東京
  - 三、小説(小説断片)の登場人物における東京
  - 四、おわりに
- 

### 一、はじめに

徳川幕府が江戸に開かれて以来、徐々に増えて来た東京の人口は明治維新を境目に急増し、日清戦争の勝利とともに急成長した産業資本主義によって当時の東京は世界的な大都市になっていた。しかし、それに伴う諸矛盾が最も露骨に現れていた場所それが東京であった。と言うのも、そもそも東京の近代化は民衆のためのものではなかったからである。

たとえば、「市區改正は“封建都市”としての江戸の延長にあった東京の市街地を“國家の都市”につくりかえるための官僚的都市造成事業であり、直接、市民の生活の改善や向上をめざしたものではなかった。」「その事業はネオ＝バロック風の都市美を追求する西歐の都市計画のなかで、一九世紀のなかばのパリの再開発をモデルにしていた。当時、パリの都市改造はフランス第二帝政期のナポレオン三世のもとで、セーヌ縣知事オースマンが道路の建設をはじめ街路・公園・下水道を中心にすすめた街づくりであった。そのなかで、とくに道路の擴張は、革命期の市街戦などでパリ市民や労働者のつくったバリケードをとりはらうために都合のよいように、おこなわれたものである。」<sup>2)</sup>

---

\* 本論文はHANBAT 大學校二〇〇二年度校内學術研究費支援によって作成された。

\*\* HANBAT大學校 副教授 日本近代文學

1) 橋川文三(1962)『日本の百年 7』、p.221

そして、日清、日露戦争による地租増徴や消費税追加、物價騰貴など民衆生活は困窮を極めた。ゆえに、東京は生存競争の激しいところであった。石川天崖は明治四二年の東京の様子を次のように述べている。

東京は東洋第一の都會であると同時に、また東洋第一の生存競争の激烈なところである。地方のことわざにも、食えなければ乞食をするということがある。東京においてはその乞食すらもできないのである。<sup>3)</sup>

そういった時代の歪みは近代都市「東京」の隅々にあらわれた。そこに生きる民衆の悲惨な生活の様子も問題であったが、解消せねばならぬ本能的な問題もあった。例えば、公娼吉原が安定した江戸的「性」の場であったとすれば、「制度」圏から除外された浅草の十二階塔あたりの私娼窟は明治の近代都市「東京」が生んだ不安定な「性」の場であったのである。そこでの體驗をもとに近代日本文學中屈指の作とされる「ローマ字日記」を啄木が残したことはよく知られている。

そのアンダーエリアのグロテスクなイメージや機能は、漱石におけるロンドンのイースト・エンドや鷗外の『舞姫』の豊太郎がエリスと出会うベルリンのクロステル街と一脈通ずるものであり、ロンドンやベルリンこそ近代産業文明が頂点を極めた場でありながら、それにとまなう都市化現象の暗黙面がもっとも鋭く露呈した場であったといえよう。それは、まさに西歐列強による植民地化の危機のもとに近代化の遅れを一刻も早くとりもどそうとした明治近代の産業資本主義社會の近代都市「東京」の抱えていた負的な問題であった。そういった時期に啄木の「東京」での歩みは行われたのである。「東京」は啄木の文學にどのように描かれるのであろうか。

## 二、啄木における東京

啄木がはじめて東京の地を踏むのは明治三二年六月五日のことである。その時のことについて啄木のテキストは残っていないが、詳細な傳記研究により、上野驛に轉任した山本千三郎(次姉トラの夫)の家の訪問であったことが分かる。

以後、啄木は明治三五年十一月、明治三七年十月、明治三九年六月にもそれぞれの目的を持って上京するが、その目的はほとんど果たされない。

---

2) 石塚裕道・成田龍一(1986)『東京都の百年』、山川出版社、p.64

3) 橋川文三(1962)『日本の百年 7』、p.220-221

そして、啄木の最後の上京が明治四一年四月二八日に行われる。家族を放置したまま、北海道の放浪生活を打ち切って、文學を以て身を立てるために上京したのである。啄木は上京後まもなく金田一京助の厚意で寓するようになった本郷区の赤心館より森鷗外に書簡を書いている。

海氷る御國のはてまでも流れあるき候末、いかにしても今一度、是非に今一度、東京に出て自らの文學的運命を極度まで試験せねばと決心しては矢も楯もたまらず、養はねばならぬ家族をも當分函館の友人に頼み置きて、單身縁の都には入り候ものの、（明治四一年五月七日）

ここには、上京への切實な念願の思いや自立への意欲がよく示されている。しかし、啄木にとって「養はねばならぬ家族」を「友人に頼み置き」してまでも、自分の文學的運命の試験の場所が東京でなければならなかった必然性はあるのであろうか。

木股知史はベンヤミンのことばを借りて「『文士は、遊民として市場へ赴く。それは、かれの考えでは市場を眺めるためなのだが、じっさいにはもう、買手を見付けるためなのである。』」「パトロンを失った近代の文學者は、資本主義の市場である都市と言う舞臺に遊民として登場する」<sup>4)</sup>と書いている。つまり、啄木が無理してまでも上京したのは、自分の文學の「買手」を求めたからである。東京という大都市には文壇が形成されているなど、そういった条件がもっともよく整っていたのである。

このような状況は啄木だけのものではなく、当時の文壇の多きな特徴でもあった。自然主義文壇の形成過程を見ると、主に地方出身である自然主義文學者たちも文學を持って自立するため續々と上京している。例えば、島崎藤村は家族を犠牲にしてまでも上京して文筆生活に取り組んだ。これは文學者のみにおける現象ではない。様々な人が様々な目的を持って上京したのである。啄木の小説の登場人物もその例になるだろう。その分析については後述する。

木股知史は啄木が上京して住んだところに注目して、そこは「地方からのあまり豊でない上京者がかりそめにとどまるところが多かった。」<sup>5)</sup>と言う。その住居地の一つの本郷区森川町の蓋平館別荘で、啄木は次のような日記を書いている。

九番の室に移る。珍な間取の三疊半、稱して三階の穴といふ。眼下一望の麓の谷を隔てて、杳かに小石川の高臺に相對してゐる。左手に砲兵工廠の大煙突が三本、斷間なく吐く黒

4) 木股知史(1992)『イメージの圖像學』、白地社、p.213

5) 木股知史(1992)『イメージの圖像學』、白地社、p.205

煙が怎うやら勇ましい。晴れた日には富士が真に見える」と女中が語った。(明治四一年九月八日)

「室は妙な形に間取った三疊半で、一人居てさへ窮屈相」(無題)なところで、啄木の眼をひいたのが小石川の「砲兵工廠の大煙突」とその「黒煙」である。そして、啄木はその「大煙突」の「黒煙」からの幻想と思われる次のような文を書いている。

君も知つてる如く、下宿の僕の窓から砲兵工廠の三本の大煙突が見える。四五日前の或朝、僕は何時もなく早く起きて窓に倚つて居た。と、彼の大煙突の一本が薄い煙を吐き出した。僕は其時初めて今迄煙の出てるなかつた事に気が付いた。薄い煙は見る見る濃くなつた。大きい眞黒な煙の塊が、先を争ふ様に相重つて、煙突の口の張裂けむ許りに凄まじく出る。折柄風の無い曇つた朝で、毒龍の様な一條の黒煙が、低く張詰めた雨雲の天上を貫かむ許りの勢ひで、眞直に天に昇つた。僕は我を忘れて一心に其壯景に眺め入つた。其何分かの間、僕は僕が呼吸してゐる事を忘れてゐた。やがて僕は、更にそれよりも壯大な光景を欲するの情を起した。そしてこんな事を考へた。何れの都會も、有りとする工場を其中央に集める。幾千百本の煙突を合して唯一本の巨大な煙突を立てる。其煙突は現在見てゐる砲兵工廠の煙突より何百倍何千倍太く月つ高く、それから吐出す煙も現在見てゐる煙より何百倍何千倍太く且つ凄まじい。そして都會と都會とは各々其煙突をより太くより高くせむことを競争する。あゝ、その時になつて其煙突を見上げる人々の心地は甚麼<sup>どんな</sup>であらう! そして其都會の中、其煙の風下に當たる區域は劇しい煙毒の爲に生物の健康が害はれ如何なる健康者でも其區域に住んで半年経てば、顔に自と血の氣が失せて妙に青黒くなり、眼が凹んでドンヨリする。「島田君の書簡」

この内容から當然のように、木股は「小石川區は、産業化によって最もはげしく變貌した地域」として「労働者の急増」とともに「かつて蜀山人の住んだ城北の文人の居住區は、煙突が林立する工場街に變貌して」「煤煙による被害が発生していた」と。そして、「やがて」「啄木の描き出した幻想は現實になる」<sup>6)</sup>と。

また、近藤典彦はそこから「大氣汚染」への「豫見能力」を読み取っている。<sup>7)</sup>

一方、この「小石川の砲兵工廠」こそ帝國主義の象徴の軍事工場である。否、「國家の都市」「東京」自體がそうであったのである。つまり「日清戦争の勝利後、政治・經濟・教育・文化の諸領域にわたる政策體系の再編と)あらたな對露帝國主義戦争への軌道を設定する政府の戦後經營のなかで、もっとも突出した部分は軍備擴張であった。」「首都東京は、そのため戦場へ兵員や物資を供給する兵站基地として“軍都”にかわつた。」<sup>8)</sup>のである。勿論、これは日露戦争勃發直前の記述であるが、戦争が終わってからも、そ

6) 木股知史(1992)『イメージの圖像學』、白地社、p.205

7) 近藤典彦(1995)『啄木 六つの豫言』、ネスコ、p.35

の帝國主義政策は益々強化して行ったのである。

啄木の小説のなかにも、日清戦争や日露戦争の犠牲者について書かれている。前述した「天鷲絨」の石本の「兄さん」や「鳥影」の「お利代」の「二度目の夫」がそれである。「お利代」の「二度目の夫」は「日露の役」で「何か軍律に背いた事があって死刑にされた」のであった。

そういった帝國主義の「兵站基地」としての「東京」という視點に注目して、「島田君の書簡」をみよう。

つまり、「中央」に集中して「唯一本の巨大な煙突」を立てようとする「都會」（＝帝國主義）は「毒龍の様な一條の黒煙」を「吐き出」しながらその「煙突をより太くより高くせむことを競争する」。これらの帝國主義の「競争」によって作り出される植民地、そして、その民の姿は「劇しい煙毒の爲に生物の健康が害はれ」「顔に自と血の氣が失せて妙に青黒くなり、眼が凹んでドンヨリする。」しかなかったのである。

實際、啄木が「小石川の砲兵工廠」の「黒煙」が持つこのような言説を察知していたかどうかは分からないが、この「黒煙」の「毒」が植民地の隅々へと「靡いて」て行ったのは事實である。

一方、この「小石川の砲兵工廠」は「日清・日露の兩度の戦役を通じて増強され、明治三九年の職工數は二萬二千人を越えていた。」これを象徴するように、「小石川区の人口は一八八三年に比べて明治末は四倍に達していた。」<sup>9)</sup>小石川区の周辺には工場労働者が溢れていた。そこは、住宅、衛生、下水、道路などの色々な問題を抱えていた。しかし、こういった物理的な問題だけではない。

そこに溢れる若い單身労働者たちにとっては性の問題もあった。例えば、啄木の小説「天鷲絨」を見ると、「丑之助」は「若者宿」によって「性」の問題を解決するが(お定の部屋へ夜ばいする)、この「丑之助」が上京労働者になるとすれば、遊郭に通う蓋然性は多い。こういった需要を反映するように、當時の娼婦の人數はかなり増えていた。「明治・東京における娼妓(公娼)と藝妓人數の變化」を見ると、その數は二倍以上も増えている。「しかし、これら以外の多數の娼婦豫備軍もあわせれば、それらの人數はもっと多かつたはずである。」<sup>10)</sup>

例えば、淺草の十二階塔あたりの私娼窟のようなところは統計からも除外されていたのである。ある意味では、吉原を中心とした公娼が安定した場所であったすれば、淺草の十二階塔あたりの私娼窟は統計からも除外されていたように、「制度」圏から除外された不

8) 石塚裕道・成田龍一(1986)『東京都の百年』、山川出版社、p.68-69

9) 木股知史(1988)『イメージの日本近代文學誌』、雙文社出版、p.120-121

10) 石塚裕道・成田龍一(1986)『東京都の百年』、山川出版社、p.99

安定な、ゆえに、より悲惨な場所であったと言えよう。つまり、公娼には行かれない「制度」圏から除外された労働者たちの悲惨な姿がそこにあったのである。

啄木もそういった労働者の姿とそれほど差はない。啄木は當時有名な私娼屈であった浅草の十二階塔あたりの風景を次のように書いている。

夜、金田一君と共に浅草に遊ぶ。……凌雲閣の北、細路紛糾、廣大なる迷宮あり、此處に住むものは皆女なり、若き女なり、家々御神燈を掲げ、行人を見て、頻に挑む。…路上に客を擁して無理無體に屋内に拉し去る。…“學生さん” “寄つてらつしやいな” (日記、明治四一年八月二一日)

そして、やがて啄木はその女を買う。

いくらかの金のある時、豫は何のためらうことなく、かの、みだらな聲に満ちた、狭い、きたない町に行つた。豫は去年の秋から今までに、およそ十三、四回も行つた、そして十人ばかりの淫賣婦を買つた。……しかしそれらの女は、……まだ十六ぐらいのほんの子供なのも、…顔につやがなく、肌は冷たく荒れて、……わずかの金をとつてその淫部をちよつと男に貸すだけだ。それ以外に何の意味もない。……

(「ローマ字日記」四月十日)

この時の啄木の心情は、北海道の家族は上京をせめて来るし、小説は賣れないどん底の生活のなかでの自暴自棄的なものであると思われるが、啄木の視線は彼個人のレベルから離れ、その淫賣婦の實態へ向いて行く。そして、啄木はそこにおける問題を指摘する。次は啄木の「時代閉塞の現状」の一節である。

(毎年何百といふ官私大學卒業生が、其半分は職を得かねて下宿屋にごろごろしてゐるではないか。)一中略一今日我邦に於いて、其法律の規定してゐる罪人の數が驚くべき勢ひを以て増して來た結果、遂に見す見す其國法の適用を一部に於いて中止せねばならなくなつてゐる事實(微罪不檢舉の事實、東京並びに各都市に於ける無數の賣淫婦が拘禁する場所が無い爲に半公認の状態にある事實)は何を語るか。

啄木が意識したこういった時代閉塞の情況が多く都市的現象であることは注目に値する。ここには、「いわば、明治近代の資本主義發展にともなう都市化現象の暗黙面がとらえられている」<sup>11)</sup>のである。大都市「東京」の矛盾を他の文學者より鋭敏に感じていた啄木の眼がそこにあるのだ。

11) 中山和子(1992)「啄木と時代閉塞」『國際啄木學會臺北大會論集』、國際啄木學會、p.256

### 三、小説（小説断片）の登場人物における東京

それでは、啄木の小説や小説断片における上京者たちに東京はどのように描かれているのであろうか。

#### 一) 資本や学歴のない者の場合

まず、「雲は天才である」の石本俊吉の場合をみよう。

石本の東京での生活というのは「其頃の悲惨なる境遇は兎ても一朝一夕に語りつくす事が出来ない、餓えて泣いて、國へ歸らうにも旅費がなく」「さる人に救はれる迄は定まれる宿とてもなかった位。」であった。「東京では飯喰ふ道を失ひ、止むなく」「友を便つて乞食をしながら」故郷へ歸るしかない悲惨な状況、それが石本の東京での暮らしであった。石本は「大都の中央へ投げ出された」「磔の如」き者であった。「非常な大望」を果すために求めて来た東京は、石本を乞食に、「磔」にさせた場所であった。

ここに田中禮氏は啄木の二度目の上京の體驗の反映を見ているが、12)次のような小西豊春氏の文を考慮すれば、それは啄木だけの體驗ではなく多くの民衆のものでもあったのだ。

「そもそも日露戦争は我が國が維新以降近代國家形成へ歩み出した過程のなかでもっとも重大な出来事であると同時に、もっとも國民に負擔をかけ國民に困苦を強いるものであった。五億円程度の財政規模で十七億円餘の戦費を要する戦争の負擔は、すべて國民が擔つたのである。未曾有の重税と巨額な國債を課せられた國民はの戦争によって瘦せ細らねけならなかった」13)のである

次に、「天鷲絨」のお定の場合はどうであらうか。

お定が上野驛に到着し、語手はその時の感想を次のように書いている。

まだ見た事のない夢を見てゐる様な心地で、東京もなければ村もない、自分といふものも何處へ行つたやら、在るものは前の腕車に源助の後姿許り、唯ぼんやりとして了つて、別に街々の賑ひ、あかりを仔細に見るでもなかつた。燦爛たる火光、千萬の物音を合せた様な轟々たる都の響。其火光がお定を溶かして了ひさうだ。其響がお定を押潰して了ひさうだ。

この文は初めて大都會に接した時の田舎者の當然たる感想でもあるといえよう。繁雜な大都會の表だけの初印象というものはそういったものであろう。そして、二日目、お定は「お吉に伴れて」、電車にも乗り、赤門、淺草、凌雲閣、銀座の通り、新橋のステーション

12) 田中禮(1978)『論攷 石川啄木』、洋洋社、p.148

13) 小西豊治(1980)『石川啄木と北一輝』、傳統と現代社、p.8

ン、日比谷公園、水族館、蒸気船など東京や大都會の持つ文明の一端を見物する。この時は都會の異物に關心を示したり、ときめきするなど、大都會が持つ魅力に惹かれて肯定的評價も混じるはずだが、しかし、東京はお定にとってひたすら「疲れ」る場所である。

大都是其凄まじい轟々たる響を以て、お定の心を壓した。然しお定は別に郷里に歸りたいとも思はなかつた。それかと言つて、東京が好なのでもない。此處に居やうとも思はねば、居まいとも思はぬ。一刻の前をも忘れ、一刻の後をも忘れ、穩なしいお定は疲れてゐるのだ。

つまり、お定にとって、東京とは文明の利益が集結した場所という陽のイメージではなく、その裏面に伴われる負的なイメージとしてしか映されていないのである。この點は、お定を語っている語手即ち作者の意思がより強く反映されていたためではないか。こういった東京のイメージは「空家」の松太郎<sup>14)</sup>や「不穩」の「私」<sup>15)</sup>にとつても同じである。

また、「我等の一團と彼」と「鳥影」の場合はどうであろうか。

「我等の一團と彼」の高橋は「今日の東京」について次のように書いている。

今日の東京は殆どあらゆる建築の様式を取込んでゐる。つまり彼れは何だ。何時とはなく深い谷底に來て了つて、何處へ行つて可いか、方角が解らない。そこで各自勝手に、木下に宿を取る者もあれば、小屋掛けをする者もある。それから……色々の事をしてるが、ただ一つ解つてゐるのは、それが皆其晩一晩だけの假の宿だといふことだ。明日になれば皆で何方かへいかなければならんといふことだ。

つまり、東京は安住のできない「假の宿」のような場所なのである。高橋における東京認識は、「天鷲絨」のお定が「自分といふものも何處へ行つたやら」分からないような自己喪失の場所、「雲は天才である」の石本が自分は「大都會の中央へ投げ出された」「礫」のような存在としてしか認識されない場所である。即ち、人間を疎外化、屈折化させ

14) 松太郎は東京について、「日本にもこんな人にみられるかと怪まれるほど人だらけな東京が、何の事はなく唯自分一人を容れまいとしてゐるやうに見え、そして自分自身の體も何かしら目にうしろ見えぬ繩に縛られて、出るなと後方へ牽かれてゐるやうな氣がする。」のように述べている。

15) 次の文は東京に對する「私」の感じである。

「遂に私は草臥れた。且餓ゑた。其時私は、あのぼうぜんとして騒擾の中に立つてゐる朱塗の雷門の下から疲れた神経に鑢するやうな、舗石道しきいしに無數の下駄の擦れる音に包まれて、目まぐるしい夜の仲見世の混亂した光と色の中へ足を運んでゐた。その晝よりも明るい賑はひは、都會が初め田舎者の心に押し付ける威壓のやうに、譯もなく私の心をおびえさせた。」「一夜でも可いから東京を離れて安らかに眠つて見たかつた。それほど私は疲れてゐた。」



る場所であった。

それは「鳥影」の吉野の東京認識でもある。

轟然たる物の音響の中、頭を壓する幾層の大厦に挟まれた東京の大路を、苛々した心地で人なだれに交つて歩いた事……目の下を飛ぶ電車、人車、驅足してゐる様な急しい人々、さては……強い色彩の種々の建物、などを眺めて、取留もない、切迫塞つた苦痛に襲はれてゐた事などが、怎うやら遙と昔の事、否、他人の事の様に思はれる。

以上で見ると、各登場人物における東京のイメージはほぼ共通している。つまり、立身や成功を求めて来た東京は彼らの夢を砕く場所、または彼らを疎外化、屈折化させる場所であったにすぎなかった。ある意味では、そもそも彼らの立身というのは無理であったのかも知れない。資本や學歴なき彼らの劣敗者の姿は彼らの個人的能力と言うより東京と言う競争社會によって、また産業資本主義と言う社會によって、すでに決められていたからである。

## 二) 資本や學歴のある者の場合

ところで、資本や學歴のある者における東京はどのように描かれているのであろうか。

まず、「天鷲絨」の源助の場合である。

源助の現在は東京で「熟練な職人を四人も使つてゐる」成功した理髮師である。語手はその成功の過程について何も語っていないが、少なくともその成功の背景に相當な資金の支えがあったと思われる。以下、その分析である。

「立つ時は白井様で二十円呉れたさうだし、村中からの御饞別を合わせると、五十円位集つたらうと、羨ましさに計算する者もあつた。それ許かりじやない、源助さんは此五六年に百八十兩もおツ貯めたげなど、知つたか振をする爺もあつた」と語手は書いている。そしてこの文の次に「が、此源助が、白井様の分家の、四六時<sup>しよつちゆう</sup>リユウマチで臥てゐる奥様に、或る特別の懇懃を通じて居た事は、誰一人知る者がなかつた。」と書いている。ところが、源助の村を去るに際しての語手の説明には疑問の餘地がのこる。というのは、源助は「父親が死んだとかで」「俄かに荷造」をするが、「暇乞だけは家毎にして、家毎から御饞別を貰つて」しかも、「二三日」もかかって立っているからだ。ここに、不自然さはないだろうか。また、源助が四年ぶりに村を訪れて、村の人々は「翌日は、各々自分の家に訪ねて来るものと思つて」、その準備をするが、「源助さんは其日朝から白井

様へ上つて、夕方まで出て來なかつた」のである。お世話になった白井様を四年ぶりに會つたから、長い話しもありそうだが、しかし、私にはかつての源助と「奥様」との関係がひっかかるのである。このくだりと「が、此源助が、白井様の分家の、四六時リユウマチで臥てゐる奥様に、或る特別の懇懃を通じて居た事は、誰一人知る者がなかつた。」の語手のニアンスには、語手が語っていないある事實が隠れているのではないか。つまり、源助が村を去るようになった理由は「父親が死んだ」ためではなく、大地主の「白井様」が「奥様」と源助との「懇懃を通じ」た関係を知り、村から追い出したのではないか。その代わりに、源助は白井様から噂の「二十円」だけではなく、相當の大金をもらっていると推測するのは無理ではないだろう。この假説に立って、源助はそういった資金をもとにしてきたからこそ、また自分の才氣を生かして、東京での成功は可能であつたのではないか。つまり、源助の東京での成功にはそれなりの資金の支えがあつたのであると言えよう。

次に「鳥影」の小川信吾の場合を見よう。

小川信吾は東京のある大學の英文學科の生徒である。彼は「心して聞けば、其謂ふ所に、或は一貫した思想も意見も無かつた」「又、其好んで口にする泰西の哲人の名に就いて彼自身の有つている知識も疑問であつた」ぐらゐのにせ知識人である。にも拘らず、信吾は常に他者への優越感を持っている。語手は信吾における東京については何も語らないが、それは少なくとも、親友吉野の「『夢を見る暇もない都會の烈しい戦争の中で、<sup>ひつさり</sup>間斷なしの壓迫と刺戟を享けながら、切迫塞つた孤獨の感を抱いてる」のようなものとは違ふものであろう。そこには、おそらく「郡でも相應な資産家」また大學の英文學科の生徒という背景があつたためではないか。つまり、社會に出て優位に立つことのできる有効な手段が學歷であつたのである。

こういった學歷主義は次のような小説にも見ることができる。前述した小説「雲は天才である」の石本俊吉の場合を見よう。

石本俊吉は、「高等小學校を卒業した頃は、山も畑も他人の所有に移つて、少許の田と家屋敷が残つて居た丈」で、「新橋へ着いた時は懷中僅かに二円三十錢と五厘あつた丈」の身である。その石本が立身できる唯一の方法は學歷を付けることであつたし、だから、石本自身も悲惨な暮しの中でも「非常な大望を抱いて」「學校に籍だけは置いた」のであろう。しかし、如上のような社會で「勞働と勉學」を兩立するのは、そもそも無理であつたし、その結果は乞食になつての歸郷の身である。

こういった狀況は「葉書」の乞食の學生においても、「何か職業にありついて、自活しながら勉強する積もりだつた」「松太郎と或る空家」の松太郎においても同じであつた。

#### 四、おわりに

啄木の小説に東京が負的に描かれるのは登場人物が學歷や資本無き者であるゆえんである。例外に、源助や小川信吾の優越感にあふれる姿には資本や學歷という背景があった。以上のように見ると、啄木が各登場人物の失敗の姿に託して、何を語っているのかが見えるのではないか。つまり、啄木は産業資本主義の矛盾がもっとも露骨に現れている場所「東京」において、資本や學歷無き者の立身がいかに難しいかについて異議申し立てをしているのである。

#### 【参考文献】

- ・木股知史『イメージの圖像學』、白地社、1992、p.213、205
- ・小西豊治『石川啄木と北一輝』、傳統と現代社、1980
- ・橋川文三(1962)『日本の百年 7』、p.221
- ・石塚裕道・成田龍一(1986)『東京都の百年』、山川出版社、p.64
- ・近藤典彦(1995)『啄木 六つの豫言』、ネスコ、p.35
- ・木股知史(1988)『イメージの日本近代文學誌』、雙文社出版、p.120-121
- ・中山和子(1992)「啄木と時代閉塞」『國際啄木學會臺北大會論集』、國際啄木學會、p.256
- ・田中禮(1978)『論攷 石川啄木』、洋洋社、p.148
- ・小西豊治(1980)『石川啄木と北一輝』、傳統と現代社、p.8

## 要 旨

啄木の小説に東京が負的に描かれるのは登場人物が學歷や資本無き者であるゆえんである。例外に、源助や小川信吾の優越感にあふれる姿には資本や學歷という背景があった。以上のように見ると、啄木が各登場人物の失敗の姿に託して、何を語っているのかが見えるのではないか。つまり、啄木は産業資本主義の矛盾がもっとも露骨に現れている場所「東京」において、資本や學歷無き者の立身がいかに難しいかについて異議申し立てをしているのである。

K C I

キーワード：東京, 都市, 近代産業資本主義, 學歷主義, 立身出世, 雲は天才である

투 고 : 2003. 2. 25  
2차 심사 : 2003. 3. 22  
3차 심사 : 2003. 4. 12

住 所: 대전시 유성구 덕명동 산16-1 한밭대학교 일본어과  
電 話: 042-821-1349  
E-mail: jsyun@hanbat.ac.kr